様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月１２日現在

機関番号：３２６９４
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：　２３８２００６０
研究課題名（和文）　ルネサンス期フィレンツェにおける修道院聖堂主祭壇周辺装飾に関する研究
研究課題名（英文）　A Study of the Renaissance Decorations of the Spaces Around the Main Altars in the Convent Churches in Florence
研究代表者
伊藤　拓真（ITO TAKUMA）
恵泉女学園大学・人文学部・助教
研究者番号：８０６１０８２３

研究成果の概要（和文）：
本研究は、フィレンツェ都市部の修道院聖堂において、15 世紀後半から 16 世紀前半に行われた主祭壇周辺（主礼拝堂など）の装飾を多角的に論じることを目的とした。主たる事例として、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂主礼拝堂の装飾を中心として研究を行い、サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂やサンタ・トリニタ聖堂などの事例との比較検討を行った結果、祭壇画、壁画、ステンドグラスなどの多様な装飾形態による作品間の図像学的整合性や、光源や空間表現の実現方法といった点から制作の経緯を検証し、装飾の制作当初の様態や、注文主、修道士団、芸術家・職工の間の関係についての新知見を得た。

研究成果の概要（英文）：
Spaces around the main altars of convent churches were usually decorated in accordance with their special functions as the center of the friars' religious activities. This study is a multifaceted analysis of such projects carried out in Florence, Italy, between the second half of the 15th century and the beginning of the 16th century, in the convents of Santa Maria Novella, Santa Trinita and Santissima Annunziata. The focal point of the study is the decoration of the main chapel of Santa Maria Novella, which involved the Dominican friars of the convent, the Tornabuoni family as the patron, and Domenico Ghirlandaio and other artists and artisans. This study re-examines the relationship among the various artists and artisans, and reinterprets the original setting of their works through a careful examination of the iconographic program and of the space and lighting represented in the work.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１１年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：美学・美術史
キーワード：西洋美術史、ドメニコ・ギルランダイオ、イタリア・ルネサンス美術、フィレンツェ美術、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂

１．研究開始当初の背景

市民社会の発展した中世末以降のイタリア諸都市では、教会装飾における個人のパトロネージの重要性が増したが、修道院聖堂のなかでも主祭壇周辺（主として主礼拝堂）は、修道士たちの聖務日課やミサのための中心的な場であり、修道院側が装飾の主導権を確保しようとした。例えば、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂のドメニコ会士たちは、主礼拝堂装飾を特定の一家によるパトロネージに全面的に委ねることを嫌い、トルナブオーニ家、サセッティ家など複数の家族に分割して装飾を行わせていた。しかし、15 世紀後半から 16 世紀前半にかけて、フィレンツェ内部での権力の集中によって生まれた特定の有力者が、修道院聖堂の装飾にもこれまでにない主導権を主張するようになる。その結果、主祭壇周辺の装飾における修道院側の意向と、一般市民である注文主の意向の調整が大きな問題となった。

上述のサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂主礼拝堂では、メディチ家の権力と結びついたトルナブオーニ家が半ば非合法的手段により他家を排除し、1480 年代半ばには主礼拝堂の全面的パトロネージを獲得した。この経緯に関して、古くはＡ・ヴァールブルグの研究により注目を集めたが、近年Ｒ・ハットフィールド、Ｊ・シュミットなどによる再考が行われていた（A. Warburg, “Francesco Sassettis letztwillige Verfügung,” in H. Weizsäcker, *et al.*, *Kunstwissenschaftliche Beiträge August Schmarsow gewidmet zum 50. Semester seiner akademischen Lehrtätigkeit,* Leipzig 1907, pp. 129-152; R. Hatfield, “Giovanni Tornabuoni, i fratelli Ghirlandaio e la cappella maggiore di Santa Maria Novella,” in W. Prinz and M. Seidel, eds., *Domenico Ghirlandaio: 1449 – 1494*, Firenze 1996, pp. 112-117; J. Schmid, *Et pro remedio animae et pro memoria: bürgerliche repraesentatio in der Cappella Tornabuoni in S. Maria Novella*, München 2002）。

1500 年前後のフィレンツェにおいては、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂主礼拝堂のほか、サンタ・トリニタ教会主礼拝堂、サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂主祭壇周辺などの装飾が行われた。これらの事例に関して、個別の研究は行われていたが（F. Falletti and J. Nelson, eds., *Filippino Lippi e Pietro Perugino: la Deposizione della Santissima Annunziata e il suo restauro*, Livorno 2004）、修道院付属聖堂という観点からの包括的な研究は十分とは言えなかった。

２．研究の目的

本研究の特色は、修道院聖堂のなかでも独自の機能を有していた主祭壇周辺に着目したうえで、装飾の分析を行うことにある。装飾の実現にあたってのパトロネージの側面からは、従来の研究では資金を提供した注文主（一般市民）に着目するものが大半だが（E. Borsook and J. Offerhaus, *Francesco Sassetti and Ghirlandaio at Santa Trinita, Florence: History and Legend in a Renaissance Chapel*, Doornspijk 1981 など）、本研究では修道院側の対応も併せて考察した。

主礼拝堂周辺装飾に関して、歴史的変化を考慮に入れ、かつ同時代の諸事例の比較を行った先例研究は乏しく、本研究は個々の事例の独自性を明確にする意味も持つ。また、主礼拝堂周辺の装飾を総体として分析するにあたっては、壁画、彫刻の他に、ステンドグ

ラスや共唱席の木工装飾なども分析の対象とし、従来のフィレンツェ美術研究の主流である個別の芸術家研究もしくは作例研究においては看過されがちな複数の作品の関係性や設置方法などにも焦点をあてた。

分析の対象としては、ルネサンス期のフィレンツェを代表する装飾事例であるサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂主礼拝堂を中心的なものと位置づけ、他の事例との比較・対照を進め、関連作品・文書の調査を通じて、以下の3点を明らかにすることを主たる目的とした。

(1) 修道院聖堂の主礼拝堂装飾に関して、通常の礼拝堂の装飾とは異なる空間的な機能・特質を把握したうえで、個々の事例を分析し、その特徴を明らかにすること。各事例の共通点・相違点を明らかにすること。

(2) 主礼拝堂としての機能および修道院側の意向と個人によるパトロネージの両面から対象事例を分析すること。

(3) 修道院聖堂の後世の改変などを含めた歴史的な展望のなかに、ルネサンス期フィレンツェの事例を位置づけること。

３．研究の方法

(1) 主たる分析対象としたサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂主礼拝堂に関して、ドメニコ・ギルランダイオによる壁画に加え、解体され各地の美術館に分蔵されている両面祭壇画や、ステンドグラス、共唱席の木工象嵌装飾なども分析の対象とし、包括的な研究を行った。同主礼拝堂に関しては、さらに下記の観点から研究を行った。

①既存の関連文書の分析を進めるとともに、フィレンツェ国立公文書館などで調査を行い、注文に際しての金銭の流れや注文主と教会側の交渉を明確にした。

②現在各地に分散して所蔵される祭壇画の実地調査を行った。実地調査の一環として、研究の初年度である 2011 年度に、パルマ近郊マニャーニ・コレクション、ブタペスト国立西洋美術館などに所蔵されている諸パネルの実見調査を行った。

(2) 同時代のフィレンンツェ、および関連地域の諸事例の比較・検討を行った。すでにあげたサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の主礼拝堂のほか、フィレンツェのサンタ・クローチェ聖堂、サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂などの事例を主たる比較対象とした。また同礼拝堂が制作された直後から後年の対抗宗教改革期の改変まで、時間軸に沿った分析を行うことで、当該事例の歴史上の位置づけを確認し、対抗宗教改革期の聖堂空間の改変への連続性を検証した。

４．研究成果

(1) サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂主礼拝堂装飾に関しては、作品調査や文書調査の結果に基づき、主礼拝堂のために制作された祭壇画に関して、先行研究で提示されていたものとは異なる再構成案を得るところとなった。さらに、この再構成案を礼拝堂全体の壁画装飾などと比較し、作品内での光源や遠近法的空間の設定方法を分析した。この結果については、フィレンツェにおける他の修道院聖堂の事例と比較検討を行った。研究成果に

ついて、美術史学会例会で口頭発表「ドメニコ・ギルランダイオ作、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂（フィレンツェ）祭壇画再構成と主礼拝堂装飾における空間・光源・視点の設定」を行ったほか、英文による論文を執筆・投稿した（審査中）。

(2) 上記の研究成果と並行して、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂主礼拝堂の装飾において、ドメニコ・ギルランダイオが制作した祭壇画・壁画と、それ以外のステンドグラス、木工象嵌装飾の関係を考察した。特に、注文主およびドメニコ会士を中心とした注文主側が、全体の図像や表現上の統一性に対してどのような影響力を及ぼしたかを考察し、それを基礎として芸術家間の関係を分析した。その結果、複数の芸術家が協力しながらも独自の判断で制作を行っていたことを明らかにした。この結果は、論文「ドメニコ・ギルランダイオ、アレッサンドロ・アゴランティと 15 世紀末のフィレンツェにおけるステンドグラスの諸相：トルナブオーニ礼拝堂を中心として」として出版された。

以上 2 点の研究成果を中心とし、本研究はサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂主礼拝堂の研究に一石を投じると同時に、ルネサンス期フィレンツェの修道院聖堂の主祭壇周辺の装飾に関する特徴を明らかにすると同時に、後世の改変などを含めた歴史的な展望のなかに位置づけるものとなった。さらに、サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂（フィレンツェ）などの事例との共通点・相違点についても明確にするところとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
伊藤拓真「ドメニコ・ギルランダイオ、アレッサンドロ・アゴランティと 15 世紀末のフィレンツェにおけるステンドグラスの諸相：トルナブオーニ礼拝堂を中心として」、『恵泉女学園大学紀要』、vol. 25、pp. 131-152、2013 年.

〔学会発表〕（計１件）

伊藤拓真「ドメニコ・ギルランダイオ作、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂（フィレンツェ）祭壇画再構成と内陣装飾における空間・光源・視点の設定」、美術史学会東支部例会、2012 年 9 月 9 日（慶應義塾大学三田キャンパス）.

６．研究組織
(1)研究代表者
伊藤　拓真（ITO TAKUMA）
恵泉女学園大学・人文学部・助教
研究者番号：８０６１０８２３

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：